22122039

International Baccalaureate®
Baccalauréat International
Bachillerato Internacional

JAPANESE A2 – STANDARD LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A2 – NIVEAU MOYEN – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A2 – NIVEL MEDIO – PRUEBA 1

Thursday 10 May 2012 (morning)
Jeudi 10 mai 2012 (matin)
Jueves 10 de mayo de 2012 (mañana)

1 hour 30 minutes / 1 heure 30 minutes / 1 hora 30 minutos

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Section A consists of two passages for comparative commentary.
- Section B consists of two passages for comparative commentary.
- Choose either Section A or Section B. Write one comparative commentary.
- It is not compulsory for you to respond directly to the guiding questions provided. However, you may use them if you wish.
- The maximum mark for this examination paper is *[30 marks]*.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- La section A comporte deux passages à commenter.
- La section B comporte deux passages à commenter.
- Choisissez soit la section A, soit la section B. Écrivez un commentaire comparatif.
- Vous n'êtes pas obligé(e) de répondre directement aux questions d'orientation fournies. Vous pouvez toutefois les utiliser si vous le souhaitez.
- Le nombre maximum de points pour cette épreuve d'examen est *[30 points]*.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- En la Sección A hay dos fragmentos para comentar.
- En la Sección B hay dos fragmentos para comentar.
- Elija la Sección A o la Sección B. Escriba un comentario comparativo.
- No es obligatorio responder directamente a las preguntas de orientación que se incluyen, pero puede utilizarlas si lo desea.
- La puntuación máxima para esta prueba de examen es *[30 puntos]*.

© International Baccalaureate Organization 2012

https://xtremepape.rs/

問題Aか問題Bのどちらかを選び、答えなさい。

問題A

次の二つの文章について、共通点・相違点・主題を分析し比較しなさい。またその際、筆者が自分の考えを伝えるために用いている文の構成・語彙・言葉の象徴するもの・文体などの要素を考慮に入れなさい。この二つのテキストの終わりには設問がありますが、設問に直接答える必要はありません。この設問を、単にコメンタリーを書く手がかりとして用いることも可能です。

テキスト1

我々はなぜここにいるのか。どうしてここに来てしまったのか。どうすれば、ここから逃げ出すことが出来るのか。

我々がここにいるのは、ここがどこだか解(わか)っていないからである。ことのほか、政治家や政策責任者たちが然(しか)りだ。彼らは、ここがどこであるのかを見極(みきわ)めようとしない。その無神経振りから目を覆(おお)いたい。目を覆いたい。そしてまた、目を覆いたい。その思いが募(つの)る日々だ。彼らは昨日の戦いを戦っている。昨日の夢を追い求めている。昨日の課題に立ち向かおうとばかりしている。

成長よ、再び。ハングリー精神よ、再び。追いつけ追い越せよ、再び。再び、再び、再び。この空回りに右往左往しているうちに、様々な新しい風景が我々の目の当りを過ぎ去っていく。古いアルバムを取り出してノスタルジーに浸ってばかりいるから、目の前に広がる新たな地平が目に入らない。こんなことをしていると、我々は永遠の暗闇に紛(まぎ)れ込んでしまいそうである。

今の日本は債権(さいけん)大国で成熟大国だ。そして戦後初の新興国だった。そしてグローバル時代を生きている。今まで誰も経験したことのない新天地に、一人足を踏み入れている。日本の前には誰もいない。日本が振り向けば、誰もが固唾(かたず)を呑(の)んで、功なり名遂げた「旧新興国」にグローバル・ジャングルの歩き方のお手本を求めている。（中略）

優雅なる成熟をどう演じてみせるか。それが今の日本に問われている。グローバル・ジャングルを、ゆとりで歩き抜く姿を世界にみせたい。

浜矩子(はまのりこ)『これが私たちの望んだ日本なのか』文藝春秋2011年4月号

浜矩子(はまのりこ)（1952年～）エコノミスト。同志社大学大学ビジネス研究科教授。

https://xtremepape.rs/

テキスト2

大事なのは「いま」「目の前」です。「昔」はもう、どうでもいいんです。宮崎駿(はやお)さん＝宮さんとはもうかれこれ30年、ほとんど毎日といいっていいほど話をしていますが、昔の話はしたことがない。いつも「いま」です。しゃべっていることは、いまやらなければいけないこと、そして一年くらい先のことについてです。それだけでしゃべることは山ほどある。（中略）

『もののけ姫』完成は1997年、宮さんが50代なかばのときの作品です。ぼくは横にいて、かれが描く絵コンテを見ていて、もうびっくりしたんですよ。この歳(とし)になりながら、まるで新人監督のような作り方をしている。これには驚かされた。

まず、自分の得意技をすべて封じた。もっともわかりやすい例で言うと、誰も空を飛ばない。彼はキャラクターを登場させたら、それがすぐ空を飛ぶんですが、あの映画では一回もありません。つまり、それまで自分が培(つちか)ってきたいろんなものを全部捨て去って、新しいことに挑戦した。要するに、それまでの実績を踏まえていないんです。ぼくはそこに、新人監督のような初々しさを感じた。

テーマのほうもそうです。解決困難な壮大なテーマを設定して、そこに無骨(ぶこつ)に挑む。抱え込みきれなくて、しばしばぐちゃぐちゃになったりするんですが、それを恐れない若さというか、それを感じさせられた。

内容がまだわからないときのプロモーションフィルムでは、「宮崎アニメの集大成(しゅうたいせい)！」なんて一句も出していますが、そういうものではなかった。あれは集大成ではなく、挑戦です。このあたり高畑さんはさすがです。完成試写会の挨拶で、高畑さんはこう言いました。「これは集大成なんかじゃない。宮さんは若い。いや、若返った。」

鈴木敏夫『仕事道楽(どうらく)スタジオジブリの現場』2008年

鈴木敏夫（1948年～）スタジオジブリ・プロジューサー。

宮崎駿(はやお)・・・・アニメ監督、代表作「トトロ」「もののけ姫」「千と千尋の神隠し」。
高畑(いさお)さん・・・・アニメ監督の高畑勲さんのこと、代表作「火垂(ほた)るの墓」など。

設問

– 二人の筆者は、今と昔について、それぞれどのように考えていますか。

– 二つの文章に込められたメッセージには、どのような共通点と相違点がありますか。

– それぞれの文章における表現の特徴と語調を比較して、あなたの考えるところを述べなさい。

https://xtremepape.rs/

問題B

次の二つの文章について、共通点・相違点・主題を分析し比較しなさい。またその際、筆者が自分の考えを伝えるために用いている文の構成・語彙・言葉の象徴するもの・文体などの要素を考慮に入れなさい。この二つのテキストの終わりには設問がありますが、設問に直接答える必要はありません。この設問を、単にコメンタリーを書く手がかりとして用いることも可能です。

テキスト3

依然として彼らは走り続けている。差は開くばかりだ。吹き出す汗をぬぐうのにこんなことをする選手がいる。ランニングシャツをパンツの中から引っぱり出して、タオルのように顔をふき、また急いでパンツの中へ押し込む。

先頭を走っているのは、本命のUではない。トレーニングの方法やスケジュールなどをすべて自分一人で考えて、やってのけると言われている一匹オオカミのHだ。彼のペースは速い。速すぎる。マイクロバスに乗っている関係者たちは口々に叫ぶ。「そのうちクズレるさ。」

折り返し地点。同じ道を引き返すほど腹立たしいことはないようにおもえるのだが、どの選手もうんざりしたような顔はしない。

彼らはそろそろあえぎ始めている。一度の出場で、体重が数キロも減るのだ。

マイクロバスのラジオが、ついに一匹オオカミのペースが落ちたことを告げる。大会関係者たちは安心したような、がっかりしたような、どっちにもとれるため息を漏らす。そのあと本命が出て、一匹オオカミを追い抜く。

大会関係者たちは、一斉に腰を浮かして、「クズレるぞう、クズレるぞう。」とわめき散らす。山でも崩れるのかと思って見ていると、ある選手の走り方が突然おかしくなり、みるみるうちに彼は《クズレ》てしまい、後についていた選手に追い抜かれる。

マイクロバスに乗っている私たちは、放し飼いのライオンでも見物している子供と同じだ。安全な場所から好き勝手なことをわめき散らして有頂天になっている。（中略）

本命がゴールに飛び込んだ。大勢のスポーツ記者が彼を取り囲む。私も彼に近寄る。ものすごいにおいだ。汗のにおいだけではない。彼の体から発散しているのは、勝利の喜びのほかに、アンモニアのにおいだ。しかも、太ももの内側はまたずれで真っ赤。今にも血がしたたりおちそうなほど真っ赤。

ほかの選手も次々にゴールイン。駅伝のときのように、若い女性がタオルで抱えてやったりはしない。芝生に転がって、思い思いにあえいでいる。犬のように四つんばいになっていつまでも地面を見つめている者。ゴールを目の前にして、脚の痙攣（あしけいれん）に襲（おそ）われて立ち往生している者。場内アナウンスがある。「入賞した選手は表彰台の前に集まってください。」

見物人は帰っていく。しかし、まだ大勢の徒労の使者たちはゴールをめざして走っている。

丸山健二『安曇野（あずみの）の強い風』1986年

丸山健二（1943年〜）小説家。

https://xtremepape.rs/

テキスト4

37キロあたりで、何もかもがつくづくいやになってしまう。ああ、もういやだ。これ以上走りたくなんかない。どう考えたって体内のエネルギーは完全に底をついているのだ。からっぽのガソリンタンクを抱えて走り続ける自動車みたいな気分だ。水が飲みたい、でもここで立ち止まって水を飲んだりしたら、そのままもう走れなくなってしまうような気がする。喉は渇く。しかし水を飲むのに必要なエネルギーさえ残ってはいない。そう思うとだんだん腹が立ち始める。道路脇の空地に散らばって幸せそうに草を食べている羊たちにも、車の中からカメラのシャッターを切り続ける写真家に対しても腹が立ち始める。シャッターの音が大きすぎる。羊の数が多すぎる。シャッターを切るのは写真家の仕事だし、草を食べるのは羊の仕事なのだ。文句をつける筋合いはない。しかしそれでも無性に腹が立つ。皮膚がそこらじゅうで白く小さく盛り上がり始める、日焼けの水泡だ。とんでもないことになりかけている。まったくなんという暑さだろう。

40キロを超える。

「あと2キロですよ。がんばって」と車から編集者が明るく声をかける。「口で言うのは簡単なんだよな」と言い返したいのだが、思うだけで声にならない。むきだしの太陽がひどく暑い。まだ午前九時過ぎだというのに、すさまじい暑さだ。汗が目に入る。塩気でちくちくしてしばらくのあいだ、何も見えない。手でぬぐいたいのだが、手も顔もなにしろ塩だらけで、そんなことをしたらよけいに目が痛くなる。

丈の高い夏草の向こうに、ゴールが小さく見えてくる。マラトン村の入り口にあるマラソン記念碑だ。それが本当にゴールなのかどうか、最初のうちはうまく判断できない、ゴールにしては現れ方が唐突さすぎるような気がする。もちろん終結点が見えるのは嬉しいのだが、その唐突さに、わけもなく腹が立ってくる。最後だから死力を振り絞ってスピードを出そうと思うのだけれど、どうしても足が前に出ていかない。身体の動かし方がよく思い出せない。身体中の筋肉が錆びたかんなで削られているみたいな気がする。

ゴール。

やっとゴールにたどり着く。達成感なんてものはどこにもない。僕の頭にあるのは「もうこれ以上走らなくてもいいんだ」という安堵感だけだ。

村上春樹『走ることについて語るときに僕の語ること』2007年

村上春樹（1949年～）小説家。

設問

– 二人の筆者は、マラソンを走ることについて、どのように捉えていますか。

– 二人の筆者は、それぞれどのような立場から書いていますか。

– 二つの文章において、雰囲気を伝えるために、どのような工夫がなされていますか。

https://xtremepape.rs/